



脊椎感染症に対する最小侵襲手術が国内初の先進医療認定

研究成果のポイント

- ・高齢者や糖尿病患者などの増加とともに脊椎感染症は増加。
- ・脊椎内視鏡を用いた脊椎感染症に対する最小侵襲手術を開発。
- ・我が国で初めて先進医療として認定。

研究成果の概要

高齢者人口の増加とともに脊椎感染症は増加し、薬剤耐性菌の増加とともに治療が困難になっています。抗生物質のみの投与では、感染が治癒する可能性は低く、従来の手術治療は侵襲が大きく、体力のない高齢者では術後の合併症が問題でした。直径 7 mm の内視鏡を用いた手術治療の確立により、最小侵襲で感染部を治療し、抗生物質の浸透率を高めることが可能となりました。よって、この手技の確立により、侵襲の大きな従来の手術をせずに、安全かつ効率的に難治性の脊椎感染症の治療が可能となりました。

論文発表の概要

研究論文名：

1. Manabu Ito, Kuniyoshi Abumi, Yoshihisa Kotani, Ken Kadoya, Akio Minami (北海道大学大学院医学研究科)
Clinical Outcome of Posterolateral Endoscopic Surgery for Pyogenic Spondylodiscitis: Results of 15 Patients with Serious Comorbid Conditions. (化膿性脊椎炎に対する後側方脊椎内視鏡手術の治療成績: 15 例の重篤な合併症例の成績) Spine32(2);200-206, 2007
 2. M Ito, H Sudo, K Abumi, Y Kotani, M Takahta, M Fujita, A Minami (北海道大学大学院医学研究科)
Minimally invasive surgical treatment for tuberculous spondylodiscitis. (結核性脊椎炎に対する最小侵襲手術治療) Minimally Invasive Neurosurgery, 52:250-253, 2009
- その他 8 編

研究成果の概要

(背景) 我が国では高齢者人口の増加や糖尿病患者の増加とともに脊椎感染症が増加しています。脊椎感染症は、時には命を脅かす重篤な感染症です。有効な抗生物質の投与や、感染部を外科手術で摘出するなどの治療がおこなわれていますが、抗生物質の投与のみでは治癒まで長期間かかること、一般的な脊椎手術は侵襲が大きいため、体力のない高齢者ではリスクが高いなどの問題がありました。

(研究手法) 1cm 程度の傷から脊椎の感染部に到達し、感染部位を除去し治癒を促進する低侵襲手術

治療を、2001年3月から北海道大学病院で開始し、2011年6月24日に我が国で初めて先進医療として厚生労働省から認可を受けました。

(研究成果) 北海道大学病院では、これまで100例近い脊椎感染症の治療を、この治療で行ってきました。手術直後から激しい痛みが緩和され、安全で確実に脊椎感染症を治療することができるようになりました。

(今後への期待) 高齢化社会の進展とともに、ますます脊椎感染症で悩まれる患者様が増加することが予測されます。このような最小侵襲手術により、体に優しく有効性の高い脊椎感染症の治療が身近になることが期待されています。

お問い合わせ先

所属・職・氏名：北海道大学大学院医学研究科 脊椎脊髄先端医学・特任教授 伊東 学 (いとう まなぶ)
TEL: 011-706-7587 FAX: 011-706-7436 E-mail: maito@med.hokudai.ac.jp
ホームページ: <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~e20688/>